岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第 16 号 2014 年 3 月
Bulletin of Morioka Junior College Iwate Prefectural University, No.16
55-59, March 2014

台湾先住民族の古写真解読による記憶の発掘

――浅井恵倫の写真をつかった人類学的調査報告の紹介――

Excavations of Memories with Decoding the Old Photos among Taiwan Indigenous Peoples: Review of the Report Using Erin ASAI's 1938 Photos

原　英子*
Eiko HARA

Keywords: *Taiwan Indigenous Peoples, Activities of Visiting Old Villages, Erin ASAI*
台湾先住民、ルーツ探し、浅井恵倫

1. はじめに

写真は、時として、撮影者が意図しなかったものも映像として残してくれている。写真には、文字の記録にはない歴史解読のための情報が含まれている。古写真から何が読み取れるのだろうか。

台湾では、1990 年代後半くらいから、台湾意識の高揚が顕著となってきた。台湾の歴史的建造物がリニューアルされ、台湾の歴史を見直す動きがみられた。それは先住民たちにも見られ、自分たちの歴史を見直す動きが盛んになった。こうした動きのひとつとして、台湾の先住民族たちが、自分たちの祖先が住んでいた土地を訪ねるルーツ探しの活動（尋根活動）が各地でおこなわれている。

このような台湾社会の動きを背景に、タイヤル族の趙啓明（啓明・拉瓦）は調査報告「説自己的故事―― 一九三八年浅井恵倫鏡頭下萬大社萬大群泰雅人的生活與文化（自分史を語る――1938 年浅井恵倫撮影の萬大社萬大群タイヤル族の生活と文化）」を、2007 年に台湾の国史館台湾文献館編『台湾文献』第 58 巻第 3 期（309-360 頁）に掲載した。これは台北帝国大学の言語学者、浅井恵倫が 1938 年に萬大社で撮影した写真を使って、萬大社に住むタイヤル族の人々が記憶する歴史を発掘し、報告としてまとめたものである。

『台湾文献』に掲載された趙の報告には、記憶をたどって萬大社の歴史の断片を明らかにするとともに、比較して調査現在の写真を掲載している部分がある。そのなかに現在の台湾先住民族自身のルーツ探しの活動写真などもみられる。こうして写真による過去と現在の対比をおこなっているものもあり、近年の台湾先住民の活動として非常に興味をそそられる報告となっている。

本稿では、古写真を使って人々の記憶の発掘をおこない、口述の歴史を記述した趙啓明（啓明・拉瓦）の報告の紹介をおこなうとともに、こうした古写真解読によって過去の記憶を引き出す方法――ここでは記憶の発掘と称する――がもつ可能性について考えていきたい。

2. 趙啓明（啓明・拉瓦）とその活動

まずは趙啓明（啓明・拉瓦）とその活動について記しておこう。趙啓明の名前には、漢民族の名前、趙啓明とともに、括弧つきで啓明・拉瓦（ラワン）という名前が付加されている。この括弧付きの名前を付加することに、彼の出自の複雑さが表現されている。趙啓明（啓明・拉瓦）は、1964 年に台中で生まれた。父親は漢族だが、母親は南投県仁愛郷のタイヤル族である。漢族名趙啓明の後ろに括弧で付加された（啓明・拉瓦）には、彼が出自をタイヤル族にもっていることを表している。啓明は、彼自身の出自の複雑さから、自分の民族的アイデンティティについて苦悩した日々もあったようである [1]。しかし現在は、タイヤル族の先住民文学作家として、タイヤル族に関する報告をしながら、人類学や考古学の方面でも活動している。

作家としての活動では、タイヤル族の集落での活動や日常、歴史等を描き、報道文学というジャンルにいれられている。このジャンルでの文学賞である台湾文学奨報道文学類で、2003 年には「白毛人的前世今生（白毛社の人々の歴史）」という作品が、第 1 位を受賞している（のちに彼の作品をまとめた『移動の旅程』に再収録された）。同じ 2003 年には、キリスト教カトリック教会の耕莘文教基金会が主催する第 24 回耕莘文学奨 [2] で作品「鋼鐵望楼」が優秀賞となっている [3]（のちに『我在部落的族人們』に再収録された）。書籍としては、それまでの作品、報告等をまとめた『重返旧部落（祖地へ帰る）』（稲郷出版社 2002 年）、『我在部落的族人們（集落の先住民とともに）』（晨星出版社 2005 年）、『移動的旅程――啓明・拉瓦的部落報導文學集（移動の旅程――啓明・拉瓦の先住民集落での報道文学集）』（稲郷出版社 2008 年）の 3 冊がある。本稿であつかう浅井写真から人々

* 国際文化学科

の記憶を発掘する作業をおこなった報告「説自己的故事」は『移動的旅程』に収められている。これら3冊の書物は、タイヤル族の諸集落でおこなわれてきたルーツ探しの活動の記録や、諸集落の歴史について、啓明・拉瓦が書き溜めた報告などから構成されている。

彼は国立自然科学博物館で人類学、考古学関係の仕事にも携わっており[4]、本稿であつかう「説自己的故事」も、啓明・拉瓦が、タイヤル族の日常を書き記すために、萬大社の高齢者から話をきいたことからはじめられた［趙2007：310-312］。

5. 台湾における台湾史の位置づけの変化と趙啓明（啓明・拉瓦）の報告

趙啓明（啓明・拉瓦）の報告が、雑誌『台湾文献』に掲載された背景には、1990年代後半から顕著になってきた台湾における台湾史の位置づけの変化をみる必要がある。『台湾文献』は台湾政府の公的機関である国史舘台湾文献館（Taiwan Historica）が編集している雑誌である。国史舘台湾文献館は、英語名称を「Taiwan Historica」という。この英語名称に示されるように、台湾に関する文献や民俗資料を整理・保管している所である。その歴史は、第二次世界大戦後の1948年に台北に設立されたことに始まる。その8年後の1956年には南投県中興新村に移動した。名称についても変化がみられる。設立時は「台湾省通史館」と称していたが、1949年から「台湾省文献委員会」と改称した。その後台湾省文献委員会は、政府機関としての改組などを経て、2002年から国史館（Academia Historica）の中のひとつの機関となった。名称も国史館台湾文献館となった。これは台湾史の位置づけが大きく変化したことをあらわしている。英語名称に示されるように、「Taiwan Historica」が「Academia　Historica」に組み込まれたのである。つまり、台湾の歴史が国史としてあつかわれるようになったのである［張2006：134］[5]。

台湾史が国史として扱われるようになった2002年は、さまざまな方面から、台湾の歴史の開拓がすすめられていた。それは、陳水扁[6]が総統となった民進党政権時代（2000年～2008年）で、台湾意識（台湾アイデンティティ）の高揚という社会的背景があった。台湾の古文書の収集、重要事件などを記した石碑の拓本を資料とした採集、歴史体験者の口述による歴史、すなわち口述史としての記録のほか、台風被害といった自然災害などから受けた人々の被害からも台湾の歴史をみなおそうとする歴史の新たな資料を求める動があった。民衆のなかに古文書を見つけ出す活動は、2005年には台湾古文書学会を成立させた[7]。歴史体験者からの口述記録の活動は、2009年に中華民国口述歴史学会を成立させた[8]。このように新たな学術研究分野が開拓されていった。こうした動きのもと、趙啓明（啓明・拉瓦）が、1938年に浅井恵倫が撮影した写真を使って、当時を知る人々から口述で歴史を聞き出す作業が行われたのである。

4. 趙啓明（啓明・拉瓦）の調査について

趙啓明（啓明・拉瓦）の調査地は、タイヤル族萬大群が住む萬大社である。台湾南投県仁愛郷親愛村には萬大(Plnawan)、松林(Poan、日本統治時代は Enago と呼ばれていた)、親愛(Pananawan)という集落があった[9]。そこで趙は集落に住む数十人の高齢者を対象とするインタヴューをおこなっている。

タイヤル(Atayal)族は、始祖伝説と言語、系統意識によって、スコレク(Seqoleq)、ツォーレ(Tseole)、セデック(Sedeq)の3系統に分けられている［台北帝国大学土俗・人種学研究室調査1935：25］。タイヤル族は、これまで何人もの研究者が分類を試みている。浅井恵倫による言語学的な分類、鹿野忠雄による分類［鹿野1946：194-201］、衛恵林などの分類がある［国史館台湾文献館2002：3］。廖守臣[10]も分類を試みたひとりで、それまでの研究成果を考慮しながら、丹念なフィールドワークをもとにした分類をおこなっている。廖の分類によると、萬大群は、ツォーレ Tseole 族群 Mabaala 系統3群のうちの1群となっている[11]［廖1984：8-9］。

萬大社は 2 つの集落から構成されている。Tataruf 集落と Shimiul という集落である。前者 Tataruf は Tsugeus という旧社から来た者たちがつくった集落である[12]。浅井恵倫が訪れた1938年より6年前の1932年は、157戸、511人の人口を擁していた［台北帝国大学土俗・人種学研究室調査1935：73］。

趙のフィールドワークは2003年1月から2005年7月にかけておこなわれ、報告は2006年に書かれた。趙は、最初、タイヤル族の民族誌作成のためにフィールドワークを始めていたのだが、2002年のインタヴューで浅井の写真をみながら高齢者たちが、69年前の状況を熱心に話し始め、彼らがよく記憶していたので、そこから写真に残されたかつての歴史を明らかにする試みがはじめられたのである。趙がインタヴューで使用した写真は、浅井恵倫が1938年6月に撮影したタイヤル族27枚の写真であった［趙2007：310-311］。

5. 浅井恵倫(1894-1969年)と調査で使われた古写真

浅井恵倫は、1895年、石川県に生まれ、金沢にあった第四高等学校を経て東京帝国大学で言語学を専攻し、マライ語、インドネシア語の研究をした。1923年には台湾の離島紅頭嶼（蘭嶼）に行って当地の先住民族ヤミ族が使うヤミ語の調査をした。以後、紅頭嶼の言語調査は1928年、1931年にもおこなっている［土田1984、笠原1995：34］。

浅井がヤミ語調査で紅頭嶼にかよっていた時期の 1928 年には台湾台北帝国大学が設立され、言語学教室もつくられている。そこに小川尚義が教授として就任した。1930年、台湾総督上山満之進により先住民族研究の研究費が寄贈され、1930年から32年にかけ、浅井は小川とともに台湾先住民の言語調査をおこなった。1935年にはその成果をまとめた『原語による台湾高砂族

伝説集』が出版された。浅井恵倫は、出版の翌年、1936 年から台北帝国大学に勤めている。その後 1947 年に日本に帰るまで 11 年間を台湾で過ごしている［台北帝国大学言語学研究室調査 1935：1-2、土田 1984、笠原 1995：33-34］。趙啓明（啓明・拉瓦）が調査で使った浅井の古写真は、浅井が台北帝国大学に勤めた翌々年に撮影されたものである。

浅井は台湾各地の調査で写真を撮影していたが [13]、こうした写真資料は、笠原政治によると「公表する意図がなかった」ようだという［笠原 1995：31］。それゆえ浅井の写真は時代を特定できるものが多くはない。そのなかで時代が判明しているのは、浅井自身のメモが残っていた 1938 年と 1940 年の写真である［笠原 1995：35］。趙啓明（啓明・拉瓦）が、調査に使用した萬大社の写真は、1938 年 6 月と撮影時が記録されており、浅井の写真のなかでも時間が特定できる数少ない写真だといえる。趙啓明（啓明・拉瓦）がインタヴューにより口述の歴史を再構する試みは、時期が特定できる写真を使用することで、様々な当時の歴史的背景を重ねあわせることができる可能性をもっている。これは文字で書き表されることが少なかった先住民側からの視点の歴史として、今後の展開が期待される。

6. 古写真解読と口述史

6-1. 70 年前の人物や風景の特定と記憶の発掘

(a)2 人の警丁と吊橋の写真

70 年前の古写真に写された人物や風景をみることで、当時を知る人々にいろいろな記憶がよみがえることがある。それを話された歴史として記録する。趙啓明（啓明・拉瓦）そうしたことを繰り返し、報告を書いている。

報告にみられる趙啓明の姿勢には、浅井写真からできるだけ撮影された人物を特定しようという試みがある。趙が最初に扱った写真は、台湾の南天書局出版の『台湾原住民族映像―浅井恵倫教授撮影集―』の 68 頁に掲載されている「鉄線橋の上に立つ 2 名のタイヤル警丁？」というキャプションがつけられている写真である。趙はそこから、その 2 人の警丁が誰であったのか、人物の特定に成功している。

当時を知る人たちは、撮影された人物の名前以外にも、その背後に写っている吊橋から、いろいろな記憶を思い出す。橋を吊る鋼鐵は日本からもってきていたこと、吊橋は霧社に行くときにとおっていたこと、写真には写っていないが吊橋を渡るとその向こうに発電所があったことが思い出される。写真の 2 人が着ている制帽に腰のベルト、地下足袋という日本式の服装は、当時、皇民化運動でわたされていた話も出てくる。当時を知る人たちによって、日本人が何を彼らにもたらしたのか、具体的に語られていく。生活の様子も思い出される。橋がかかる前は服を脱いで渡河していたこと、当時のタイヤル族は泳ぎがあまりできなかったので、水が多いと渡れなかったことなどが語られている［趙 2007：315］。

(b)日本人警察官一家の写真

次には日本人警察官一家の写真が解説される。彼らの記憶に残っていたのは、萬大社の人たちがどのように警察官を呼んでいたのかだとか、警察官以外にどのような日本人が駐在していたのかといったことで、それが萬大社の人たちの目線で語られる。彼らの記憶に残った人物は、役職だけの場合と、苗字まで覚えられている人たちがいた。時にはよい印象ばかりではなく、悪い印象も記憶されている。警察官の名前は憶えていても、その妻の名前は出てこないなど、萬大社の人たちとの関わりの度合いによって記憶のされかたに違いがみられるようである。

ここでは一例をとりあげたが、他の写真についても、趙は 1 枚 1 枚に解説を加えていく。70 年前の古い写真をみることで、撮影当時の記憶を人々から掘り起こしていく作業が丹念におこなわれていくのである。

6-2. 写真と現在：写真からたどる記憶の歴史と先住民族のルーツ探しの活動

(a)人物

趙の報告のもうひとつの特徴として、撮影された被写体と現在とのかかわりを明らかにしようという姿勢がみられることである。たとえば前述の「(a)2 人の警丁と吊橋の写真」では、この吊橋の現在が調査され、橋は老朽化して危険になったことで 1998 年に撤去されたことが付け加えられている［趙 2007:315］。名前がわかった人も、どのような人だったのかが紹介される。その結果、人物の場合、写真に撮られた人物が生存し、当時のことをインタヴューすることに成功した写真もある。そうしたとき、70 年前の写真と調査現在の人物も写真で紹介されている。人物だけではなく、場所や風景の特定も試みられる。つまり、できるだけ浅井写真の 70 年後の調査時現在を撮影する試みがおこなわれたのである。

(b)ルーツ探しの活動

浅井恵倫は 1938 年に萬大社を訪問し、集落を上方から撮った写真に収めている。趙は浅井のこの写真を使いながら、当時を記憶する高齢者へのインタヴューをおこない、これら 2 集落が 6 つの大家族から構成されていたことを明らかにした［趙 2007：322］。こうしたインタヴューとともに、写真の左上方にみえる空き地が、「蕃童教育所」の運動場だったという話から、実際にその場所に行ったときの写真も掲載している。調査当時の 1998 年、その場所には木が茂っていたが、石とセメントでつくった国旗掲揚台が残っており、浅井が撮影した 1930 年代後半には、学校の運動場だった記憶が、調査現在も残されていたのがわかる［趙 2007：311、325］。この写真は、親愛村親愛国小と萬大分校で「重返旧部落」の活動として、集落のルーツ探しの活動がおこなわれたときのものである。趙の報告には、この時集まったタイヤル族の小学生たちの様子や旧集落跡地にやってきたタイヤル族の人たちの記念写真撮影の様子が写真で紹介されている［趙 2007：311, 358］。「重返旧部落」の活動で、「蕃

童教育所」の運動場が訪問され、浅井が撮った風景と、現在が比較体験されたのである［趙 2007：325］。

(C)物と風景

先住民文化復興運動の一環として、物の記憶もたどられる。浅井が撮影した萬大社の伝統的倉庫の写真をもとに、調査当時、見つけられた同様の形態の倉庫が写真に撮られる。

浅井が撮影した Shimiul 集落へ通じる道や風景は、同じ場所で調査時現在の様子が撮影されている。遠くに見える山の形から、同じ場所であることが示され、その場所は畑に変わってしまっていることがわかる［趙 2007：327、328］。

このようにして、過去と現在がつながれていく。1938 年に平面に切り取られて残された過去は、現在の様子が写され、時には人々によって、かつての集落跡地訪問という体験へと変換されていくのである。趙啓明（啓明・拉瓦）による具体的な古写真解読による記憶の発掘は、被写体となった台湾先住民族のルーツ探しの活動に、貴重な資料を提供している。

7. おわりに:

古写真から何を読み取ることができるのか。趙の報告によって、古写真は、先住民族の歴史を発掘することとともに、台湾で近年おこなわれている先住民族の集落跡地をたずねるルーツ探し（尋根活動）の活動とも深くかかわり得るものであることがわかった。浅井恵倫が撮影した 1938 年の写真は、そこに撮影された場所を訪ねたり、写真に写された伝統的な物と同じものを見つけたりすることで、文化復興にかかわる活動としても展開されている面をもっていた。

写真により当時を知る人々から得た歴史的な体験は、写真をきっかけに、70 年の時を超えて文字化された、いわば記憶の中から発掘された歴史であるということができよう。それは、過去にあったことで終わらずに、趙によって過去と現在をつなぐ試みがおこなわれた。趙の調査は、台湾における近年盛んになっている先住民族のルーツ探しの活動とも重なり合い、過去を知らなかった人々に、過去を知らせ、現在とのつながりが体験されていく。

総括すれば、趙啓明（啓明・拉瓦）によってなされた報告は、70 年前の萬大社の人々の体験が忘れ去られる前に文字化した意義をもつことに加え、先住民族のルーツ探しの活動とかかわりあうことで、過去と現在をつなぐ貴重な資料を提供する可能性を大いに広めた調査報告となっている。

古写真に写された当時を知る人々は年々少なくなっている。先住民族側からの記憶を発掘した趙啓明（啓明・拉瓦）の丹念な報告の成果は、口述の歴史として、文献資料とは異なる資料としての意義をもっている。また、ルーツ探しとかかわる事で現在の台湾先住民族におおきな影響を与えることができる資料ともなっているといえる。

【注】

[1] 啓明・拉瓦 2005 年『我在部落的族人們』（晨星出版）の著者紹介部分から

[2]「耕莘文教基金会」公式ウェブサイト
http://www.tiencf.org.tw/page1.aspx?no=77885
2014 年 1 月 6 日閲覧

[3] 台湾原住民百年文学地図＞山海文字猟人＞啓明・拉瓦（趙啓明）　http://fasdd97.moc.gov.tw/writer_query2.php?writer=24
2014 年 1 月 6 日閲覧

[4] 行政院原住民族委員會文化園區管理局　公式ウェブサイト
台湾原住民族　文学家與芸術家＞人物群像
http://portal.tacp.gov.tw/litterateur/portrait/188#Go_Top
2014 年 1 月 5 日閲覧

[5] 張炎憲 2006「国史館と台湾史研究」（日本台湾学会編『日本台湾学会報』8）http://www.jats.gr.jp/journal/journal_008.html
2014 年 1 月 7 日閲覧

[6] 民主進歩党の陳水扁は、台北市長（1994 年から 98 年）を経て 2000 年から 08 年まで第 10 代、第 11 代の台湾総統となった。

[7] 国史館台湾文献館公式ウェブサイト
国史館台湾文献館＞認識文献館＞沿革與展望＞文献採集與調査：pdf ファイル 71 頁
http://www.th.gov.tw/web/pagedoc.php?nd2=M0101
2014 年 1 月 7 日閲覧

[8] 国史館台湾文献館公式ウェブサイト
国史館台湾文献館＞認識文献館＞沿革與展望＞文献採集與調査：pdf ファイル 108 頁
http://www.th.gov.tw/web/pagedoc.php?nd2=M0101
2014 年 1 月 7 日閲覧

[9] 集落の行政区分については台湾「南投県仁愛郷公所」公式ウェブサイトを参照した。
南投県仁愛郷公所＞本郷原住民＞村落＞親愛村
http://www.renai.gov.tw/index3.asp?theme=26&acts=2&xid=13
2014 年 1 月 9 日閲覧 ローマ字表記に関しては、［国史館台湾文献館 2002：29］参照。

[10] 廖守臣(Masau Mona)（1939-1999 年）は、花蓮県秀林郷富世村出身。1961 年に台湾大学で歴史学を学んだ。1970 年代後半に、中央研究院民族学研究所から「泰雅族東賽德克群的部落遷都與分佈」（上 1977 年）（下 78 年）を発表した。1984 年の『泰雅族的文化―部落遷都與拓展』、98 年の『泰雅族的社会組織』でタイヤルの文化について詳細な調査をおこなった。［国史館台湾文献館 2002：184-186］

[11] 廖守臣によると、3 群とは南澳群、馬巴阿拉群、萬大群のことで、南澳群は碧侯、武塔、東岳の 3 村、馬巴阿拉群は新生村、萬大群は親愛村を主な居住区としている。［廖 1984：6］

[12] 南投県仁愛郷公所　公式ウェブサイト
南投県仁愛郷公所＞本郷原住民＞村落＞親愛村＞二、萬大
http://www.renai.gov.tw/index3.asp?theme=26&acts=2&xid=13
2014 年 1 月 9 日閲覧　集落のローマ字表記については趙［国史館台湾文献館 2002］による。

[13] 浅井恵倫が写した写真やフィールドノートなどは、現在、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（略称 AA 研）に「小川尚義・浅井恵倫台湾資料」という名称で保管されている。AA 研への保管にあたっては、土田滋代表「浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究プロジェクト」によって整理・電子化された。同プロジェクトの研究成果は、2005 年に『小川尚義　浅井恵倫　台湾資料研究』（東京大外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）として出版された。

【参照文献】
笠原政治編集・楊南郡中国語訳
1995 年『台湾原住民族映像―浅井恵倫教授撮影集―』南天書局
鹿野忠雄
1946「台湾原住民族の分類に対する一試案」(『東南亜細亜民族学先史学研究』(下巻)) 187-217
国史館台湾文献館篇
2002『台湾原住民史　泰雅族史篇』台湾・南投
趙啓明（啓明・拉瓦）
2002『重返旧部落』稲郷出版社
2005『我在部落的族人們』晨星出版社
2007「説自己的故事―― 一九三八年浅井恵倫鏡頭下萬大社萬大群泰雅人的生活與文化」（国史館台湾文献館編『台湾文献』第 58 巻第 3 期）309-360
2008『移動的旅程――啓明･拉瓦的部落報導文學集』稲郷出版社
張炎憲
2006「国史館と台湾史研究」（日本台湾学会編『日本台湾学会報』8）http://www.jats.gr.jp/journal/journal_008.html　2014 年 1 月 7 日閲覧
土田滋
1984「人と学問　浅井恵倫」(『社会人類学年報』10）1-28 弘文堂
土田滋代表「浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究プロジェクト」
2005『小川尚義　浅井恵倫　台湾資料研究』（東京大外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）
台北帝国大学言語学研究室調査
1935『原語による台湾高砂族伝説集』（南天書局版 1996）
台北帝国大学土俗・人種学研究室調査
1935『台湾高砂族系統所属の研究』（南天書局版）
廖守臣
1977「泰雅族東賽德克群的部落遷都與分佈」（上）（『中央研究院民族学研究所集刊』44 期）61-206
1978「泰雅族東賽德克群的部落遷都與分佈」（下）（『中央研究院民族学研究所集刊』45 期）81－212
1984『泰雅族的文化―部落遷徙與拓展―』（世界新聞専科学校観光宣導科　台湾土著民族研究専集 1）
1998『泰雅族的社会組織』（慈済医学暨人文学院出版）台湾・花蓮

【参照ウェブサイト】
耕莘文教基金会　公式ウェブサイト
http://www.tiencf.org.tw/page1.aspx?no=77885
台湾原住民百年文学地図＞山海文字猟人＞啓明・拉瓦（趙啓明）
http://fasdd97.moc.gov.tw/writer_query2.php?writer=24
台湾原住民族歴史語言文化大辞典＞廖守臣（台湾行政院原住民族委員會公式ウェブサイト）
http://210.240.134.48/citing_content.asp?id=2073&keyword=%B9%F9%A6u%A6%DA
行政院原住民族委員會文化園區管理局　公式ウェブサイト
http://portal.tacp.gov.tw/litterateur/portrait/188#Go_Top
国史館台湾文献館　公式ウェブサイト
http://www.th.gov.tw/web/pagedoc.php?nd2=M0101
南投県仁愛郷公所　公式ウェブサイト
http://www.renai.gov.tw/index3.asp?theme=26&acts=2&xid=13
中央研究院民族学研究所数位典蔵　公式ウェブサイト
http://c.ianthro.tw/

【謝辞】本稿は、科学研究費補助金基盤（C）「植民地統治期における台湾原住民に関する映像記録の鑑定及び文化人類学的考察」（研究代表者　清水純　課題番号 21601006）の報告書に筆者が速報した「古写真解読による記憶の発掘と原住民のルーツ探し――趙啓明（啓明・拉瓦）による 70 年前の浅井恵倫の写真とタイヤル族萬大社の現在――」をもとに、その後の研究会や調査研究をとおして得られた研究成果を付加し、大幅な加筆・修正をおこなったものである。